

主 題：幸福に降服する8
 聖書箇所：マタイの福音書5章9節

毎年夏になると、特に8月、この国では平和についてさまざまな事柄が語られます。終戦記念日や原爆が投下されたその日には平和ということが非常に多く語られます。毎年、広島市と長崎市の市長は「平和宣言」を原爆が落とされたそれぞれの日に行ないます。そのような町々でなされる平和宣言の主旨というのは、原子力爆弾をなくすことが世界の平和へとつながって行くというものです。このような町、市、そして、日本全体は特にこの争いに満ちた世界にあって、平和をもたらすことができるようになりたいと考えています。これは、それ自体すばらしい願いであり、私たちが推奨すべきことだと思います。けれども、自分たちの足許を見たとき、自分たちが生きているこの社会を見たとき、私たちは平和を語るることができるのかということを考えなければいけません。私たちは平和を得ているどころか、むしろ、この10年近くの間、私たちの周りにはより危険な、より争いに満ちた、そんな社会へと変貌を遂げ続けています。このような世の中にある、私たちは真剣に考えなければいけません。いったい、どうすれば平和をもたらすことができるのだろうと…。このような世の中にある、私たちはいったいどうすれば平和を押し進めて行くことができるのだろう、また、いったいどのような人物が平和をもたらすことができるのだろうと…。皆さんご存じでしょうか？聖書は皆さんがそのような人物であると教えます。皆さんは、皆さんご自身が平和のメッセンジャーであることを知っておられるでしょうか？もし、皆さんが本当に天の御国に属する者であるなら、ご自分が平和をつくる者であると理解しておられるでしょうか？

今朝、私たちは至福の教えをもう一度見て行きます。そこで私たちは天国に属する者がもっている、平和をつくる者というその特徴と、そして、そのような人物に与えられている祝福を見て行きます。心から私たちが願うことは、私たちがこのみことばを見て行く結果として、私たち自身が確かに天の御国に属する者であるということを確認し、それゆえに、すばらしい祝福が与えられていることをしっかり理解し、私は幸福であるというその確信のもとにこの人生を歩んで行くこと、それと同時に、天国に属する者として持つべき特徴をしっかりと発揮して、私たちがこの社会にあって、この教会にあって、また、それぞれの家庭にあって、平和をつくる者として生きて行く者になって行くということです。

☆幸いである人の特徴

7. 平和をつくる者

イエスはこのように言われます。マタイ5：9「**平和をつくる者は幸いです。その人は神の子どもと呼ばれるからです。**」、いつものように私たちは二つの事柄を考えて行きたいと思えます。一つは、天国に属する者、本当のクリスチャンがもっている特徴が何なのかということ、そして、もう一つは、どうしてそのような者に祝福が与えられているのか、その原因です。今朝はいつもと違って2番目を先にします。今日は最初に原因から考えて見ましょう。

1) なぜ、平和をつくる者が幸いと言えるのか、祝福を受けるか、その原因

それはこの至福の教えの後半部分に書かれています。イエスはこのように言われます。「**その人は神の子どもと呼ばれるからです。**」と。本当の祝福、私たちの幸福の原因というのは、私たちが父に似た者であるということにあるのです。神の子どもであるということです。このことを最初に見て行きます。イエスはここで「**その人は神の子どもと呼ばれるからです。**」と言いましたが、それが幸いであるといった原因なのです。私たちはここで幾つかのことに気付かなければいけません。注意深くそれを見て行かなければいけないのです。

(1) 神の子ども

まず、最初に「子ども」ということばを考えて見ましょう。新約聖書には2種類の「子ども」ということばが使われています。一つはテクノン（ギリシャ語）、もう一つはフィオス、これもギリシャ語です。両方とも親子の関係を言い表わすことばですが、両方にはそれぞれ強調点の違いがあります。テクノンは親子間にある親しい関係、愛情を表わすときに使われます。愛する子どもたち、というときにはテクノンということばが使われるのです。もう一つのフィオスということばは、親と子の間にある関係を指すのですが、親しみというより親子関係にある名誉、威厳を表わします。父と子の間にあるその関係のすばらしさ、その偉大さ、誉れを言い表わすのです。さらに、このフィオスということばはユダヤ人の社会にあって、両親の特徴を受け継いでいると考えられることばでした。ですから、もしだれかが、あなたは犬の子ですと言ったとするなら、あなたの両親は犬であるということではなく、あなたは犬のよ

うな人物ですということです。イエスがユダヤ人の前で「わたしは神の子です」と言われました。イエスはテクノンもフィオスも両方使われるのですが、多くの場合はフィオスが使われました。イエスが「わたしは神の子です」と言ったとき、ユダヤ人たちはイエスを石打にしようと思いました。なぜなら、そのことばが言い表わしたことは「わたしは神と同じ特徴をもつ存在です」ということを言っているからです。だから、彼らはイエスが自分を神と同等のものとして考えたとしたのです。この二つのことばがあるのですが、この5：9でイエスが言われた「**神の子ども**」はフィオスが使われています。そのことを考えるとき、いったいなぜ、私たちが幸いなのかということをはっきり知ることができるのではないかと思います。皆さんは神とどんな関係にあるのでしょうか？あなたは「**神の子ども**」です。神との間に名誉ある関係を築き上げられ、その関係のゆえに、私たちは神と同じ特徴を有するものとなったのだということです。

(2) 呼ばれるから

もう一つ考えたいのは「その人は神の子どもとなる」のではなく、「**その人は神の子どもと呼ばれるから**です」とあります。私たちは勝手に「私は神の子です」と宣言することができます。私たちは自分で勝手に「私は天に行くことができます」と言うことができます。事実、私たちが今外に出て会う人たちに「あなたは天国に行けますか？」と聞いたなら、ほとんどの人がその通り、私は地獄には行かないと言うでしょう。世の中の人たちは皆そのように考えているのです。これは世の中の人だけではありません。悲しいことにキリスト教会の中でも自分で勝手に「私は天国に行きます」と思っている人たちがいます。では、そのように思っているのが幸いなのでしょうか？自分でそう言うと幸いなのでしょうか？違います。イエスが言われるのは「**その人は神の子どもと呼ばれる**」です。だれがそのように呼ぶのですか？山上の説教の文脈、特にこの至福の教えの文脈を見たとき、受動態で使われているときのその行動を起こしている人がだれか、それが神であることを私たちははっきり知ることができます。神が皆さんのことを「あなたはわたしの子だ」と呼ぶのです。また、神ご自身がその宣言をされるがゆえに、天にあるすべてのものは皆さんのことを「あなたは神の子だ」と呼ぶのです。神との間に名誉ある関係に入れられ、あなたは神の特徴を反映する、そんな人物であると。もし、皆さんの横に座っておられる方が神の特徴を反映して生きておられるなら、その人を見て羨ましいと思いませんか？あの人はなんと幸いな人なのだろうと…。その人は深い愛に満ちているのです、義の生活を行なっています。きよさに満ち溢れています。その人が歩いて行くとそこには常にいろいろな人が付いてきます、魅力的だからです。まるでイエスがこの地上を歩かれたときのように…。神は言われます。「あなたは私の特徴を身に付けた、すばらしい名誉ある関係に入れられたそんな存在だ」と。イエスは言われます、この人は幸いです。なぜなら、この人はいつの日か必ず神の子どもと神が断定的に宣言してくださる、そのようにして天の御国で永遠のときを過ごすことができるからです。

けれども、この幸いは未来においてだけ起こることではありません。なぜなら、神の特徴をもって私たちが生きるのは、未来には完全にそれが行なわれますが、今この瞬間にも私たちにその影響がもたらされているのです。私たちは日々新しい者へと変えられているのです。栄光から栄光へと主ご自身の姿に近づけられているのです。私たちがこの地上での生涯を歩んで行くとき、信仰者として日々キリストに似たものへと変えられているのです。それゆえに、私たちはこの地上においても、今この瞬間にあっても、天国に属する者であるなら、神のすばらしい特徴を反映させて生きているはずで

す。いったいなぜ、私たちが祝福を受けるのでしょうか？この人はどうして「幸いなかな」と言われるのでしょうか？その理由は私たちが神の子どもと呼ばれているからです。この現実とその幸いは基づいているのです。

2) **天国民がもっている特徴とは？**

では、私たちが今現在もっているべき特徴とはどのようなものでしょう？そのように神の子どもと呼ばれている私たち、神はそのことを私たちに定めてくださって、そのように私たちを見てくださっているのです。それなら、私たちはどんな人物として生きて行かなければいけないのでしょうか？そのことが前半部分で語られているのです。

・**平和をつくる者**

イエスは言われます、「**平和をつくる者は幸いです。**」と。イエスはここで一つの特徴をハイライトしています。そこに焦点を当てています。それは、神が平和をもたらす方であるのと同じように、その特徴を身に付けているのは私たちです。だから、私たちは平和をつくる者なのです。天国に属する者は平和をつくる者です。聖書全体を見たとき私たちは、この「平和」という概念が非常に大きなテーマであることを知ることができます。旧約聖書、新約聖書両方合わせて、「平和」という単語は350回以上使われています。また、それ以外にも余りにも多くの箇所が「平和」ということに関する概念をたくさん説明しています。事実、聖書はエデンの園にあった完全な平和で始まり、新しいエルサレムにある完全な

平和で終わるのです。平和で始まり平和で終わるのが聖書です。この聖書の中心人物である神は平和の神です。ローマ16：20「**平和の神は、すみやかに、あなたがたの足でサタンを踏み砕いてくださいます。どうか、私たちの主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。**」、同じ表現がピリピ4：9「**あなたがたが私から学び、受け、聞き、また見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神があなたがたとともにいてくださいます。**」、Iテサロニケ5：23「**平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだに完全に守られますように。**」、ヘブル13：20「**永遠の契約の血による羊の大牧者、私たちの主イエスを死者の中から導き出された平和の神が、**」と、このように記されています。また、イエスはイザヤ9：6で「**平和の君**」と呼ばれています。「**ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。**」また、聖霊は何と呼ばれているでしょう？聖霊の働きは何でしょう？聖霊はガラテヤ5：22を見たとき、私たちのうちに御霊の実である「平和」をつくり出すのです。私たちの神は平和の神であり、私たちの主は平和の君であり、私たちの聖霊は平和をもたらす神なのです。それだけではありません。ローマ14：17を見ると「**なぜなら、神の国は飲み食いのことではなく、義と平和と聖霊による喜びだからです。**」とパウロは言っています。神の国というのは「平和」だと。それゆえに、この神の御国に属する人物が平和をもつ人物であると考えるのは当然のことです。この御国が、そして、御国の王が平和なのです。それゆえに、この御国の民も平和なのです。けれども、私たちはこのイエスのことばを見ると気付かなければいけません。平和をもつ者は幸い、また、平和を愛する者は幸いとは言っていません。平和をつくる者が幸いだと言うのです。本当の信徒、神に贖われた天の御国に属する者は、単に平和をもっているのではない、単に平和を愛しているのではないのです。その人は平和をつくる者なのです。平和をつくる者、それが私たちがもたなければならない特徴なのです。

◎では、いったい平和をつくる人とはどんな人なのでしょう？

だれが平和をつくることができるのでしょうか？そのことを考えるためにイエスのことばをよく考えて見ましょう。まず、私たちが聞かなければいけないことは、いったいどうすれば平和をつくる者となりますか？と質問です。この世界は平和を愛する人たち、平和を求める人たちが満ちています。けれども、平和をどれほど求めたとしても、平和をどれだけ愛したとしても、それによって平和をつくる者になっているとは限りません。では、どのようにして平和をつくるのでしょうか？

(1) 平和を知り、平和を所持していること

私たちが平和をつくる者になるためにこれが必要なのです。私たちは平和がいったい何なのかを知り、そして、平和を自分自身の生涯にもっていなければいけないのです。一般的な国語辞典でこの「平和」を引くと、このような定義が出てきます。戦いや争いがなく穏やかな状態であると。そこでは、争いが無いと言っています。けれども、私たちはさらに聞かなければいけません。だれとだれとの間にある争いですか？と。もちろん、戦争などを考えるとき、それは国と国、国家間の争いです。また、私たちが「けんか」などという個人と個人の争いです。では、国と国との争いがなければ平和なのでしょう？個人の争いがなければ平和なのでしょう？いったい、どんな争いがなくなると私たちは平和なのでしょう？皆さんこのことを考えてください。人間の最大の敵はだれでしょう？引用箇所として詩篇68篇と21篇を挙げています。そこにはこのように書かれています。68：21「**神は必ず敵の頭を打ち砕かれる。おのれの罪過のうちを歩む者の毛深い脳天を。**」、21：8-9「**あなたの手は、あなたのすべての敵を見つけ出し、あなたの右の手は、あなたを憎む者どもを見つけ出します。：9 あなたの御怒りのとき、彼らを、燃える炉のようにされましょう。主は御怒りによって彼らをのみ尽くし、火は彼らを食い尽くすでしょう。**」、これらには神の敵がだれであるのかを語っています。それはだれでしょう？もう一箇所見ましょう。エペソ2：3「**私たちもみな、かつては不従順の子らの中であって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。**」、私たちは生まれながらに御怒りを受けるべき子だったのです。私たち人間は神の敵です。ヤコブはこのように説明します。ヤコブ4：4「**貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。**」。聖書が言っている平和とはこういうことです。あなたがもし神との和解によって神との間に平和をもつことがなければ、あなたは平和をつくり出すことは絶対ないと。こういう言い方は語弊があるかもしれませんが、私たちの最大の敵は神です。神は私たちに怒っておられるのです。私たちの罪を、私たちが神を神とせず歩むその歩みに向かって、神は御怒りを燃やしておられるのです。そして、もし私たちがその問題を解決しないでそこに平和をもたらすことがなければ、私たちの生涯には決して平和はありません。どれだけ人間が努力しても、他の人たちが平和をもとうと様々な案を出し努力しても、もし神と人との間に平和がなければそこに平和が生まれることは決してありません。イザヤはそのことをこのようにまとめます。イザヤ書48：22「**悪者**

どもには平安がない。」と主は仰せられる。」と。神との和解なしに本当の平和を私たちが得ることは絶対にありません。それゆえに、平和をもつためには私たちは神の恵みによって救われないといけないうのです。イエス・キリストの贖いのわざを信じなければいけないのです。パウロは私たちにこのように言います。ローマ5：10「もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。」、イエス・キリストが私たちと神とを和解させてくださるのです。イエス・キリストの贖いの血によって私たちの罪が赦される時、私たちは神との和解を得ます。そして、その和解なしに私たちは平和を得ることも、平和をもたすこともできません。このような和解を得たとき私たちは心のきよい者になるのです。私たちの心が強められ私たちは新しい者へと変えられるのです。ですから、それまでは私たちは心の中に悪があったゆえに、そこから出てくるものによってすべてが悪に傾倒するのですが、心が変わることによって私たちは初めて人々との間に平和をもたすことができる者になるのです。ある一人の注解者はこのように言います。「罪深い人間は決して平和をつくり出すことはできない。自分たちの中にあっても、また、他の人との間にも…。罪がつくり出すことができるものは諍いと争いだけである。」と。また、偉大な説教者であったロイド・ジョーンズは「なぜ世界に戦争があるのか、なぜ、これほど絶えず国際間に緊張があるのか、この世界のどこが問題なのか、なぜ今世紀に二つもの世界大戦を経験したのか。この幸福の使信によれば、これらの問いには唯一つの答え、つまり、罪の事実があるのみ。他には何もない。罪こそその答えである。聖書によれば問題は人の心の中にあることが分かる。人の心が変わるまでは表面上の巧みな操作を試みることによって、決して問題の解決はできない。問題の源が泉にあり、川の流れ出る源泉にあるなら、川の状態を改良しようとどんなに薬品を投げ込んでも、時間と金の浪費であることは明らかである。私たちは源に遡らなければいけない。そこにこそ本質的な問題がある。」と述べています。

私たちが平和を知り平和をもつために、聖霊によって私たちの心が変わらなければならないのです。私たちが平和をもたす者になるために、私たちは神との和解を得なければならないのです。これは、私たちが平和をもたす、平和をつくる者となるための絶対条件です。もし、それがなければならぬなら、私たちは平和をもつことも、ましてや、平和をつくることも決してできません。

(2) 平和を願っていること

よく考えてみてください。もし、本当の平和を得る唯一の方法というのが救いによって私たちの心が変わることであるとすれば、平和をつくる者である私たちは人々の心に刷新が与えられることを求め、その働きをするはずで、もし、本当の平和が神との和解に基づいているものならば、皆さんがすべき平和をつくる働きとは何でしょう？神の救いを人々に与えることです。それゆえに、イザヤはこんなすばらしいことばを伝えます。イザヤ52：7「良い知らせを伝える者の足は山々の上にあつて、なんと美しいことよ。平和を告げ知らせ、幸いな良い知らせを伝え、救いを告げ知らせ、「あなたの神が王となる。」とシオンに言う者の足は。」と、そして、この箇所はパウロがローマ10：14-15で引用しています。「しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じていることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。：15 遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。次のように書かれていますとおりです。「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう。」、これはいったい人はどのようにして救いに至るのですか？という質問への答えとして語られた箇所です。聞くことがなければ救われない、語る者がいなかったらだれも聞けないと、そして、イザヤ書を引用するのは、平和を告げ知らせ、幸いな良い知らせを伝える人たちは何とすばらしいのかと…。イエス・キリストの十字架のメッセージこそが平和をつくり出すメッセージであり、平和をつくる者はそれゆえにこの福音を人々に宣べ伝えることによって平和をもたすのです。いったいどのようにして平和をつくる者となるのか？私たちが平和を知り、平和をもち、その平和を宣べ伝えるのです。けれども、イエスがここで「平和をつくる者は幸いです。」と言われたのは、単に福音を語りなさい、伝道しなさいではないのです。平和をつくる者、もちろん、それは神との和解によって始まって行くのですが、それだけではなく、生活のあらゆる面において私たちが人々との間に平和を保とうとする、平和をつくり出そうとする、そのことも含まれています。パウロはローマ12：18で「あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい。」と言います。これは単に福音を伝えなさいということではなくて、生活のすべての面においてあなたがたが可能な限り、あらゆる人との間で平和でいなさい、争いなく穏やかでいなさいと言うのです。イエスはマルコ9：50で「…そして、互いに和合して暮らさなさい。」と言われました。平和でいなさいと同じことばです。Iテサロニケ5：13でパウロは「…お互いの間に平和を保ちなさい。」と言います。私たちが単に救いを伝えることによって平和をつくるのではなく、私たちが生活しているあらゆる状況の中で、人々との間で正しい接し方をするによって平和を保とうとしなければいけないのです。

そのことを考えるに当たって、非常に重要な問題に直面します。最初の二つはシンプルでした。どうすれば私たちは平和をつくる者になることができるのか、私たちに絶対的な前提条件として必要なことは、神と和解していることでした。そこに和解、平和がなければ私たちは平和自体を知らないのです。それゆえに平和をもたらすこともできません。そして、2番目に見たのは私たちが平和を願って行かなければいけないから、人々にこの神の和解の計画、救いを宣べ伝えることでした。そして、3番目、私たちが考え始めたことは非常に難しい問題です。どうすれば、私たちは具体的に日々の生活の中で平和をもたらすことができるのでしょうか？私たちはそのことを最後に考えなければいけません。

(3) いったい、どのようにして私たちは平和をつくるのでしょうか？

平和をつくる者になるために私たちは平和をもっていなければならなかったし、平和を願っていなければなりません。では、具体的に平和をつくるために私たちは何をしなければいけないのでしょうか？これから皆さんにお分かちする幾つかの事柄はそれで全部ではありません。これ以外にもたくさんことがあります。けれども、これから見て行く幾つかの事柄を通して、皆さんぜひ、自分自身を吟味してください。私は本当に平和をつくっているかどうか、天国に属する者の特徴をもって生きているかどうか、私は本当に神の子どもと呼ばれる者であるかどうかと。なぜなら、私たちが本当に救われていて天国に属する者であるなら、このような特徴をもって平和をつくりながら生きているからです。

(a) 福音を宣べ伝える＝繰り返しになりますがこれは余りにも重要だからです。平和をつくるために私たちは福音を宣べ伝えていなければいけません。究極的な平和は神と人が和解したときにのみあるのです。これまで見て来たように、もし私たちの心がきよめられていないなら、私たちの心から出て来るものは悪に傾倒したものです。それゆえに、そのような心からは決して本当の平和が与えるはずはありません。もし人が救いを得ていないなら、そこには平安はないのです。だから、平和をつくる者である私たちは伝道するのです。だから、私たちは人々に福音を伝えるのです。神との和解のメッセージを人々と分かち合います。なぜなら、それが人々に本当の平和をもたらすことを私たちは知っているからです。皆さんが最後に福音をだれかに伝えたのはいつでしょう？昨日それをしましたと答えてくださるなら、それは本当に素晴らしいことです。平和をもたらしたい、救いを知ってほしいと、皆さんの友人や家族や職場の仲間やいろいろな人たちに福音を伝えたい、神さまどうぞ私にその機会を与えてくださいと心から祈ったのはいつですか？それともこのように祈りますか？神さまどうぞあの人にだれかが福音を伝えてくれるようにと。皆さんは平和をつくる者でしょうか？それとも皆さんは単に平和を願う者でしょうか？この違いは余りにも大きいです。

(b) 私たち自身が穏やかな者になること＝これは当然のことですが、もし、皆さんが穏やかな人物でないとすると、皆さんの周りには間違いなく平和はありません。怒りっぽい人の周りに平和はありません。何か言われたときに「ああそうですか」とゆっくり穏やかに答えることができる人と、「なんであなたそんなことを言うのですか！」と言う人とは明らかに平和のあり方が違います。皆さんは平和をつくる者になりたいのです。皆さんは平和をつくる者なのです。では、あなたの心の状態はどうですか？争いを求めて生きていますか？いろいろな事柄に怒りをもって対応するのですか？どうでしょう？ヤコブはヤコブの手紙1：20でこのように言います。「**人の怒りは、神の義を実現するものではありません。**」、「**怒るにはおそいようにしなさい。**」とその文脈の中でヤコブは語ります。皆さんは怒りっぽいでしょうか？それとも穏やかですか？私たちはよく考えなければいけません。皆さんは復讐を自分の手でしたいと願いますか？それとも神に信頼して神がされるから、私はそれゆえに私の敵対する人に会ってもその人に愛の行為を實踐して行こうとしますか？皆さんは人々から「あの人は怒りっぽい人です」と言って避けられていますか？それとも、どのような悪い状況の中でも「あの人は自制を知っている人だ」と敬われていますか？皆さんは平和をつくる人でしょうか？それとも平和を壊す人でしょうか？

(c) 自分をなくしていること＝穏やかであるということに関連するかもしれませんが、平和をつくる者でありながら、自己中心的であることはできません。ロイド・ジョーンズはこのように言っています。「平和をつくり出す人はあらゆることをいつでもそれが自分にどんな影響を及ぼすのかという面から考える人ではない。ところが、これこそが生まれながらの私たちにとって問題ごとのすべてではないだろうか？私たちはどんなことでもすぐに、それが自分にどんな影響を及ぼすのかという点から見る。私にどんな影響があるのか、私にとってどんな意味をもつことになるのか、こう考えた瞬間に、当然、そこに戦いが起こる。なぜなら、他の人も同じように考えるから。これがあらゆる争いと不一致の理由である。人は皆、自分を中心とした観点から物事を見る。それは私にとって好都合か、それで私は自分の権利・義務を守ることができるか、彼らの関心は彼らの仕えるべき主、あるいは、彼らを一つに結び合わせている偉大な存在、つまり、教会や社会や組織などではない。彼らの関心はそれは私にどんな影響を及ぼすのか、私に何をしてくれるのかということにある。これこそ、必然的に争い、誤解、論争に導く心であり、平和をつくり出す人であることの否定である。」。自己中心的に考えるとき、そこには争い

が起こる、なぜなら、私にとって何の得になるのかと考えるからです。それを求めて行くとき、私たちは人々との間に争いをもたらすことはあっても、平和をもたらすことはないと言うのです。続けて、ロイド・ジョーンズは言います。「だから、平和をつくり出す人について言える第一のことは、自分自身について全く新しい見方をしているということ、その新しい見方とは、彼は自分自身を知っており、みじめであさましい自分のことなどは全然思い悩むに値しないということとをすでに知っているということである。この自己はそれほどみじめなもの、何の権利も特権もっていない、何ものにも値しない。もし、あなたがこんな貧しい自分をすでに知っているなら、自分の心のどす黒さのゆえに悲しんだことがあるなら、真に自分を知って義に飢え渴いているなら、もうあなたは自分の権利や特権に固執はしない。そうなれば、私はどうなるのだろうと言って尋ねることもしないだろう。あなたはこのような自己をすっかり忘れてしまっているだろう。私たちが真にキリスト者であるかどうかについての最善のテストは、まさにこれであることに同意できないだろうか？すなわち、生まれつきの自分を憎んでいるかどうかということである。」。皆さんは生まれながらの自分を憎んでいますか？罪に支配され、自分のことしか考えない自分を。皆さんは自己中心的吧でしょうか？自分の願っていることがかなえられることを求めて生きていますか？それとも、自分自身の欲望を満たすこと、自己中心的事であることを心から憎み、生きて行こうとするでしょうか？皆さんは平和をつくる者ですか？それとも、平和をつくることを憎む者ですか？

(d) 他の人を愛すること = 多くのことをこの中で言うことができるのです。非常にたくさんの具体的な事柄があります。でも、このひと言でまとめるなら、愛を実践するということにあります。時間がないので詳しく見ませんが、皆さんどうぞマタイ 5 : 43 - 48 をご覧ください。イエスはそこでこの至福の教えと同じことを語っています。「『**自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め。**』と言われたのを、あなたがたは聞いています。:44 しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。:45 それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。:46 自分を愛してくれる者を愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。取税人でも、同じことをしてはいませんか。:47 また、自分の兄弟にだけあいさつしたからといって、どれだけまさったことをしたのでしょうか。異邦人でも同じことをするではありませんか。:48 だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。」、ここでイエスはユダヤ人のリーダーたちが言う「いったいだれが私の隣人なのか」ということへの明確な答えを与えています。ユダヤ人のリーダーたちはみことばを曲げて考え、敵は私たちの隣人ではないから憎んでも構わないと思っていました。けれども、イエスはそんな解釈を拒絶されたのです。神はご自身の敵を愛されました。私たちが愛してくださったのです。そして、私たちのために平和をつくる者となってくださり、私たちに愛を、平和を与えてくださいました。それと同じように、私たちが敵を愛し彼らの前にあって平和をつくる者にならないといけななのです。どこから始まるのか、44 - 45 節でイエスが言われることは「**祈りなさい**」です。祈ることから始まるのです。イエスはそのように祈られました。十字架の上でイエスが死を体験されるまさにそのとき、イエスは「**父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。**」(ルカ 23 : 34) と祈られたのです。使徒の働きの中で、ステパノが殉教するとき彼が祈ったことは「**主イエスよ。私の霊をお受けください。**」…「**主よ。この罪を彼らに負わせないでください。**」(使徒 7 : 59 - 60) でした。私たちが愛さない人、私たちの敵となっている人たちを愛し、彼らに平和をつくらうとすることは難しいことです。それが分かっているから私たちは祈るのです。主よ、どうぞ彼らに平和をもたらすことができるように、彼らを愛することができるようにと。

それだけではありません。その文脈を見て行くとイエスは「あいさつ」をすることについて具体的な例を挙げています。皆さん、あいさつしたくない人を避けて道を変えるということはありませんか？愛したくない、良いことばを掛けたくないからです。けれども、平和をつくる人はそのような小さなことから始めるのです。それを確かに実践して行くのです。愛の行為を積み重ねて行くことによって、その人にとって最善が何であるのかを理解し、それをもたらそうとすることによって、その人は平和をつくるのです。

(e) 義をもたらすことによって = 多くの人たちにとってこのことが一番難しいことかもしれません。なぜなら、私たちは愛という名のもとに義を妥協することがあるからです。これを言ったら今ある平和が乱れるからこれは言わないでおこうと、そんな経験はありませんか？これを言うと問題が起こるからとにかく黙っておこうと…。皆さん、よく覚えておいてください。根本的な悪に対する解決が見えないときに、表面上どれだけ平和を保とうとしても、それは停戦しているだけでしかありません。だから、ときが来れば必ずそこには再び争いが起こります。平和があるのではないのです。休戦しているだけなのです。ロケットを打ち合っていないだけ、こぶしがとんでいないだけ、いやなことばが吐かれていない

だけ、そんなときに心の中に平和があるでしょうか？ありません。では、どのようにして心に平和をもたらすのですか？私たちは誤解してはいけません。義と平安は同時に起こるのです。義のないところに平安は起こりません。平安のないところに義はありません。神は妥協される方ではないからです。私たちが罪を人から別つことがなければ、そこには真の平安は生まれません。それゆえに、平安をもたらそうと思ったなら、私たちは平和を壊している原因を責めないといけないのです。そこに罪があるならそれを悔い改めるように人々に勧めないといけないのです。悔い改めを訴えずに平安をもたらすことができるとするならば、それは私たちの大きな誤解です。イエスは何と言われたでしょう？究極の平和をつくる人物であるイエスはこのように言われます。マタイ10：34「**わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思っはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。**」、なぜなら、本当の平和が与えられる前には、そこで罪との戦いがあるからです。そこに義が勝利しなければならぬのです。

「**平和をつくる者は幸いです。**」、イエスは決して一度も義を妥協して人々との間に平和をもたらそうとしたことはありませんでした。だから、次の至福の教え5：10「**義のために迫害されている者は幸いです。**」の通りです。なぜ迫害されるのでしょうか？私たちが人々を責めるからです。私たちが人々の罪を解決しようと働くからです。もし、皆さんがその働きに従事していないなら、皆さんは決して平和をつくる者ではありません。あの人との関係を保ちたいから、あの人があんな悪いことをしていたとしてもそれに目をつぶろうと、もしあなたがそう言うなら、あなたは平和をつくる者にはなっていません。よく覚えておいてください。愛の行為は義をもたらす行為でもあるのです。神との間に正しさをもつことは私たちの願うことです。

皆さんは幸いな人です。なぜなら、皆さんは神の子どもと呼ばれているからです。そして、神の子どもであるゆえに、皆さんは平和をつくる者です。争いに満ちているこの世にあって、皆さんはこの世の希望です。戦いしか見受けることができないこの危険な日本の社会にあって、皆さんは平和をもたらすことができる希望です。皆さんには平和のメッセージがあります。皆さんはこの平和を知っています。そして、皆さんはこの平和を広げることができるのです。それは皆さんの家庭から始まるのです。夫婦の中であって、親と子どもの関係の中であって、舅・姑との関係の中であって、皆さんの近所つきあいの中であって、皆さんの職場にあって、そして、皆さんの教会にあって、そして、それは私たちの国をも変える力をもっているのです。なぜなら、神の平和があるときに、そこには平和をつくる者が生まれて来るからです。願わくば、私たちが愛と祈りをもって、また、私たちのことばを通して、この社会に神が与えるすばらしい平和をつくり出す者になって行きたいと思ひます。そのような者へと神が変えてくださることを期待しながら私たちは歩んで行きましょう。